



戦始末

矢野 隆 著 (講談社)

関ヶ原で大勢が決したのち敵中突破を図った「島津の退き口」、織田信長を救った「金ヶ崎の退き口」。殿軍でどう振る舞えるかで男の価値は決まる。覚悟を決めた男たちの最期と、切り開く未来を描いた戦国短編集。



ダーク・マネー

ジェイン・メイヤー 著 (東洋経済新報社)

トランプを勝利させた「反リベラル」の風は、ある私的ネットワークによってつくられたものだった！カネで政治を動かす億万長者の正体を、実力派ジャーナリストが徹底取材により明らかにする。



整形外科 Q&A ハンドブック

井尻 慎一郎 著 (創元社)

腰痛におすすめのマットや布団は？歳を取ると骨折が治りにくくなる？偽痛風とはどのような病気？患者のリクエストを元に選んだ百八十四の疑問や質問に、行列のできる神戸の整形外科医がわかりやすく答える。



児童書 たまごにいちゃん たまごねえちゃん

あきやま ただし 作・絵 (鈴木出版)

(幼児向け)

甘えん坊だったたまごにいちゃんも、ちよつとわがままだったたまごねえちゃんも、今では立派な大人になりました。そんなふたりのことも、たまごにいちゃんとたまごねえちゃんにそっくりで…

豊山俳句クラブ

青山克己選

- 天からの手紙でしようか雪の花 坪井昭子
こだわりを貫き通し雑煮炊く 杉浦みどり
御火焚の行者一瞬駆け抜けし 村上ゆり子
天心に下弦の月の冴へゆけり 小塚美枝
二歳児の子にあまりたる師走かな 石黒貴代子
極寒の岸辺動かぬ鳥の群れ 杉本衿子
芹すこし強く香りて七日粥 坪井径子
山門を無言のままの修行僧 安藤春一
灰色の咳一つして寒に入る 青山とも子
まう逢へぬ人となりしや黄水仙 水野真弓
異次元のバリの聖夜に眠りを 谷崎 琴
鈍色の空おもかりし二月尽 高木須磨子
冬の山こつんこつんと暮れてゆく 田村多喜子
冬耕の土に鋤きこむ薄日かな 岡島 齋
ヒリヒリと風がみがきし冬の川 青山克己

豊山歌壇

水野笑子選

- 挑戦の日々振り返ればこの年が 水野勝代
白き障子に影絵を写す庭木木に 村上 一枝
小鳥加はり南天ゆらす 山田 米
この年も最後の白バラ小輪を 惜しみつつ採る今日は立冬 山田 米
君逝きしさびしき忘るる菊の花 手折りし束を花びんに挿しぬ 渡辺トヨ子
白き雪蒼穹の天を流れてゆく のんびり乗りて流れてみたし 安達洋子
岩村の城跡を訪ひし吟行会 幾年過ぎしか思ひは尽きず 荒川昌枝
年取れば月日の流れ早くなり 病院通ひも多くなりたり 安藤定岳
知らぬ間に帯状疱疹とふ病ひ得て 吾が日常のリズム狂ひぬ 一柳千鶴子
目まぐるしき日常なれど「信念を 持ちて生きよ」と亡父言ひるき 井上とよほ
過去すべて忘れて生きて生きた 未知の世を生く断捨離とは何 木村和子

編集後記

私にとって、バスは常に身近な存在である。通学通勤、ちよつとした外出、旅行の際にも、頻りにバスを利用し続けている。今月号の特集では、公共交通の利用がご自身の健康維持や地球環境の改善につながることをお伝えした。ここでは、私が一乗客として見出ししている、バスの利点を三つご紹介したい▼一つ目は、土地勘が身につくこと。特に、行ったことのない目的地へ行くとき、外の景色とバスのアナウンスに気を留める。停留所ごとに異なるランドマークや利用者の多寡にその土地の日常を感じる▼二つめに、新たな発見があること。自分で車を運転しているときには目を向けていなかったことに気づく。気になる店、公園など、何気なく窓の外を見ているだけで、思いもよらぬ発見がある▼最後に、乗車時間を自由に使えること。学生だった頃、試験が近づくと、バス車内では教科書を開いて知識を詰め込んだ。今では、読書をした、その日の予定を立てたり、自由に過ごしている▼バスの語源は、ラテン語で「すべての人のために」を意味する「omnibus」。町民の皆さまが身近に感じることのできる公共交通網を目指していきたい。